

## estar+gerundioの記述と考察（上）

山村, ひろみ  
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/5519>

---

出版情報：言語文化論究. 11, pp.141-163, 2000-03-01. 九州大学言語文化部  
バージョン：  
権利関係：

## estar+gerundio の記述と考察 (上)\*

山 村 ひろみ

### 0. はじめに

スペイン語には、以下の例文が示すような、繫辞動詞 *estar* と現在分詞からなる動詞迂言形式がある。下線部分は当該形式を示す。

Ahora él está trabajando en la oficina.

今彼は会社で働いている。

この *estar+gerundio* (以下、*estar+ger.* と略記する) という形式には様々な用法があるが、Butt & Benjamin (1994<sup>2</sup>) はそれらを以下の、i) 進行中の出来事、ii) 一時的な出来事、iii) 延長された出来事、iv) 反復された出来事の用法という4つにまとめている。

#### i) 進行中の出来事：

Ahora no se puede poner, está haciendo sus cuentas. (Butt & Benjamin 1994<sup>2</sup>: 232)

今彼は電話に出られません、計算中ですから。

#### ii) 一時的な出来事：

Vive en París, pero últimamente está viviendo en Madrid. (Ibid.:234)

彼はパリ住まいですが、最近はマドリッドに住んでいます。

#### iii) 延長された出来事：

Pero, ¿vas a estar esperándola todo el día? (Ibid.)

でも、君は1日中彼女を待っているつもりなの？

#### iv) 反復された出来事：

Está viniendo a casa estos días. (Ibid.)

彼はこのごろよく家に来ている。

これらの用法はそれぞれ、*estar+ger.* という形式が持つ本質的機能のある環境下における変異的表出と考えられるが、その本質的機能自体についてはこれまで、当該事態の *duración* 「継続」を示すという説と当該事態の *actualización* 「現前化」を示すという説

\*本稿は1999年10月30日京都外国語大学において開催された第45回日本イスペインヤ学会で発表した内容に加筆・修正をし、まとめたものである。

<sup>1</sup>「継続説」を取るものとしてはRAE (1973), Gili Gaya (1979<sup>12</sup>), Rallides (1977), Solé & Solé (1977), Gómez Torrego (1988) を、また、「現前化説」を取るものとしてはFernández Ramírez (1986), King (1992), Westfall (1995), Quesada (1995) をあげることができる。

の二つの解釈が提示されてきた<sup>1</sup>。以下は「継続説」の代表的解釈である Gómez Torrego (1988) と「現前化説」の代表的解釈である Fernández Ramírez (1986) の記述である。

“En general, la perífrasis *estar+gerundio* expresa la acción durativa, con más precisión y concreción que el tiempo correspondiente de la conjugación. De ahí que cuando un hablante o escritor, ante la posibilidad de elección entre esta forma y la perifrástica, se inclina por ésta, se debe, en parte, a que la perífrasis es más expresiva y, al mismo tiempo, porque su carácter prolongativo presenta en el terreno estilístico imágenes descriptivas muy plásticas.” (Gómez Torrego 1988:139)

「一般に *estar+gerundio* という迂言形式は継続的行為を、対応する時制単純形よりも正確かつ具体的に表わす。このことから、話し手や書き手が時制単純形と迂言形式とを選択する可能性のあるとき後者を選びがちなのは、一部には迂言形式の方がより表現力に富んでいると同時に、その継続的性質が文体的に非常に造形的な記述的イメージを表出するからである。」

“Tal vez no es otra la razón de que la perífrasis con *estar* ponga de relieve, en determinadas condiciones, el acto singular, en contraste con las formas simples del verbo en los tiempos imperfectivos (*está diciendo* en contraste con *dice* y *decía*), adscritas a significar la habitualidad y lo permanente. Éste sería otro de los aspectos del carácter diríamos plástico, intuitivo y directo, casi cinematográfico, de la fórmula con *gerundio*.” (Fernández Ramírez 1986:538)

「おそらく *estar* を用いた迂言形式が特定の条件のもとで単一の行為を強調し、習慣性や永続性を意味するように割り当てられた不完了時制の動詞単純形と対照を見せるのは (*está diciendo* 対 *dice*, *decía* のように) まさにそのためである。このことは現在分詞を用いた公式の、造形的、直感的かつ直接的で、ほとんど映画のといってもいい諸側面のひとつであろう。」

上記二つの解釈のうちどちらが *estar+ger.* の諸用法をもれなく整合性のある形で説明することができるのか。それとも、*estar+ger.* には、これら二つの解釈をも包含できるような何か別の統一的な本質的機能があるのか。このような問題を考えるにあたっては何よりも各解釈と *estar+ger.* との実態とを照合してみる必要があるが、残念ながら、これまで *estar+ger.* の実態に関する詳細な報告はほとんど提出されることがなかったように思う。そこで本稿では、まず、同形式の総合的な実態調査を行い、その結果を踏まえた上で、*estar+ger.* の機能をめぐる二説の再検討ならびに同形式に対する新たな観点からの考察を加えていきたい。なお、本稿では、第1節 *estar+gerundio* の実態、第2節考察、第3節まとめという論文全体の構成のうち、第1節のみを扱う。

## 1. *estar+gerundio* の実態

本稿は、*estar+ger.* の実態を観察するにあたり、①どのような事態が *estar+ger.* によって表出されているか、②*estar+ger.* はどのような時制によって表出されているか、③*estar+ger.* はどのような環境のもとで出現しているか、という項目をたて、それらをスペインで発行されている週刊誌 *Cambio16* 中のインタビュー記事に出現したすべての *estar+*

ger. を対象にして、調査することにした。その結果は1.1., 1.2., 1.3. のようにまとめられる。

### 1.1. estar+gerundio によって表出される事態の分類

estar+ger. の実態のうちまず調べたのは、同形式とそれによって表出される事態との関係、すなわち、どのような事態が estar+ger. によって表出されやすいかという点であった。この調査の実施に際しては、予め estar+ger. によって表出された当該事態を分類するための方法・基準が明示されていなければならないが、本稿では1.1.1. に示すような山村(1999)で提起された方法・基準を用いることにした。

#### 1.1.1. 事態の分類基準

山村(1999)で提起されたスペイン語の事態分類の方法・基準は、フランス語の事態を対象としその分類を試みた Garey(1957)と英語を対象としながらその分類を行った Vendler(1967)の折衷案といえるものであり、大きく次の二段階に分けられる。

- I. 当該事態の imperfecto による表出が pretérito の表出内容を包含するか否か。この問いに対する回答が肯定のとき、当該事態は atelic に、また、否定のときには telic に分類される。
- II a. I の分類の結果、当該事態が atelic の場合、その imperfecto による表出が pretérito の示す事態成立後の結果状態を示しているのであれば state 類、その imperfecto による表出が pretérito の示す事態成立の連続・累積を表出しているのであれば activity 類と分類される。
- b. I の分類の結果、当該事態が telic の場合、再度その補語を除いた動詞部分だけに I の基準を適用し、その結果が atelic なときには accomplishment 類、telic な場合には achievement 類と分類される。

上の基準のうち I は Garey(1957)の提起したものをそのままスペイン語にあてはめたものであるが、Garey が動詞のみを対象として事態の分類を行っていたのに対し、山村(1999)は動詞のみならずその主語、補語までを対象とした点で異なっている。また、I の基準にしたがった分類はそのまま、当該事態の時間構造の中に恣意的ではない終結点(natural final endpoint)が設定できるか否かという問題に対応しており、I で telic と判断されたものはそれが可能なもの、また、atelic と判断されたものはそれが不可能なものとなる。一方、基準 II の a. は Vendler(1967)が英語の state 類事態と activity 類事態の相違について述べていたことを参考にしながら設定したものであり<sup>2</sup>、b. は同じく Vendler(1967)が英語の accomplishment 類事態と achievement 類事態との間に設定した基準を元に設定したものである<sup>3</sup>。以下、これらの基準を適用した際に各類の典型と見なされる

<sup>2</sup> Cf. Vendler(1967), p.106. 英語における state 類と activity 類との違いは、本稿の基準 I にあるような概念的相違に基づくものではなく、state 類は be+ing 形による表出が不可能だが activity 類は可能である、という明確な形式的相違に基づいたものである。

<sup>3</sup> Cf. Ibid., pp.103-104.

スペイン語事態をあげてみる。

state 類 : [María saber la noticia] (マリアがその知らせを知ること)

María sabía la noticia. ⊃ María supo la noticia.

マリアはその知らせを知っていた。マリアはその知らせを知った。

activity 類 : [José correr rápido] (ホセが早く走ること)

José corría rápido. ⊃ José corrió rápido.

ホセは早く走っていた。ホセは早く走った。

[María escribir cartas] (マリアが手紙を書くこと)

María escribía cartas. ⊃ María escribió cartas.

マリアは手紙を書いていた。マリアは手紙を書いた。

[llegar al pueblo personas extrañas] (不審な人たちがその村に到着すること)

Llegaban al pueblo personas extrañas. ⊃ Llegaron al pueblo personas extrañas.

不審な人たちがその村に到着していた。不審な人たちがその村に到着した。

accomplishment 類 : [María escribir una carta] (マリアが1通の手紙を書くこと)

María escribía una carta. ⊃ María escribió una carta.

マリアは1通の手紙を書きつつあった。マリアは1通の手紙を書いた。

[María ir a la playa] (マリアが海岸に行くこと)

María iba a la playa. ⊃ María fue a la playa.

マリアはその海岸に行くところだった。マリアはその海岸に行った。

achievement 類 : [el tren llegar a la estación] (その汽車が駅に到着すること)

El tren llegaba a la estación. ⊃ El tren llegó a la estación.

その汽車は駅に到着しつつあった。その汽車は駅に到着した。

⊃は当該事態の imperfecto が pretérito の表出内容を包含することを示している。つまり、state 類の María sabía la noticia. は María supo la noticia. を包含し、activity 類の José corría rápido. は José corrió rápido. を、また、他の事態も同様に、その imperfecto は pretérito の表出内容を包含していると考えられる。しかし、state 類と activity 類との間には基準Ⅱ a. で述べたような時間構造の概念的違いがある。state 類の imperfecto は当該事態成立後の結果状態を示すが、その持続のためにはいかなるエネルギーも必要とされない。つまり、それが真になるためには、ただ当該事態が成立したということだけが保証されていればよいのである。それに対して、activity 類の imperfecto は当該事態の連続的あるいは累積的成立を示しており、それが真になるためには、まず pretérito によって表出される当該事態の成立、そして、その連続化あるいは累積化が保証されていなければならない。このうち特に後者の点は、activity 類の典型例のうち [María escribir cartas] では、その直接目的語が、また、[llegar al pueblo personas extrañas] では、その主語が不定の複数形となっていることによって確認することができる。

⊃は当該事態の imperfecto が pretérito の表出内容を包含しないことを示すが、これは telic 事態に共通の特徴である。上で見たように、telic 事態には基準Ⅰの適用後、その動

詞部分にだけ再度基準 I が適用され、その結果 atelic と判断されるものは accomplishment 類, telic と判断されるものは achievement 類と分類される。この accomplishment 類と achievement 類の相違は両者の間にある telicity の質的差異であり、前者の telicity がもつばらその動詞以外の部分が担っているのに対し、後者のそれは動詞自体が担っているということができる。このうち accomplishment 類の特徴は上にあげた二例、[María escribir una carta]と[María escribir cartas]の差異に明らかで、同じ escribir（書く）という動詞が用いられていても、その直接目的語が特定単数の前者はその終結点が明らかなため telic の accomplishment 類と分類されるが、それが不定複数の後者はその終結点が不明となるため atelic の activity 類に分類される。しかし、このような動詞以外の構成要素の影響は telicity の高い achievement 類事態にも及ぶことがある。例えば、上記の [llegar al pueblo personas extrañas]という事態と[el tren llegar a la estación]という事態はどちらも典型的 telic の llegar（到着する）という瞬間動詞をその構成要素としているが、その主語が不定複数である前者は activity 類、その主語が特定で単数である後者は achievement 類に分類されることになるからである。この分類上の違いは、各事態の主語の性質、すなわち、単数か複数か、特定か不特定かに起因したものであり、動詞以外の部分はその分類に関与するという点において、先に見た[María escribir una carta]と[María escribir cartas]と類似した現象といえる。

### 1.1.2. 調査結果

以上の分類基準を用いて、実際の estar+ger. と事態との関係を調査した結果は、表 1 のようにまとめられる。

表 1 estar+ger.によって表出される事態の分類

activity 類	578例(76.5%)
state 類	91例(12.2%)
accomplishment 類	43例(5.7%)
achievement 類	42例(5.6%)
抽出総数	754例(100%)

抽出総数754例のうち、もっとも頻度の高かった事態は activity 類で、全体の76.5%を占める。以下、頻度順に並べると state 類, accomplishment 類, achievement 類となるが、全体としては、estar+ger. は atelic 事態を対象とすることが多いといえる。まず、もっとも頻繁に出現した activity 類事態の estar+ger. から見ていくことにする。

estar+ger. によって表出される activity 類事態は(1)に見られるような有生主語と活動を表わす動詞からなるものが多く、今回の調査では578例のうち305例までがこのタイプだった。

(1) Estamos trabajando para que su programa sea más rico. (1425:88)<sup>4</sup>

私たちは彼の番組がもっと豊かなものになるように働いています。

しかし、estar+ger.によって表出された activity 類事態の中には、(2)のように無生の事物を主語としながら、その活動を示しているものも少なくない。

(2) Por ejemplo es verdad que el proceso laboral está funcionando muy bien, [...] (1425:18)

例えば、本当に労働訴訟はとてもよく機能しています。

さらに、estar+ger.によって表出された activity 類事態の特徴としては、(3), (4)に見られるように、動詞自体は telic であるが、その主語や補語が不定複数のために当該事態全体としては activity 類事態に分類されているものが多いという点も指摘しておきたい。このようなものは、estar+ger.によって表出された activity 類事態の2割にも上っている。

(3) Ahora está recibiendo nuevas amenazas de grupos fascistas. (1424:13)

今彼はファシストグループから新たな脅威を受けています。

(4) No hay calefacción ya en muchas zonas. Se están destruyendo fábricas y esto tendrá un efecto terrible sobre la economía del país. (1436:66)

もう多くの地域で暖房がありません。工場が破壊されているのですが、これは国の経済に大変な効果を及ぼすことでしょう。

以上の estar+ger.によって表出された activity 類事態は、対応する単純形が表出する activity 類事態と同様に当該事態の成立を前提としているが、解釈上は Fernández Ramírez が指摘していたように、当該事態の習慣的・永続的側面というよりは、むしろ、その動的な側面、すなわち、その連続的・累積的側面を強調しているように見える。

次に estar+ger.によって表出された state 類事態を見てみる。今回の調査では estar+ger. で表出された事態全体の12.2%が state 類事態であったが、これはある意味で意外な数字である。というのも、先行研究の中には、estar+ger. は state 類事態を対象とすることはないと明言するものさえあるからである<sup>5</sup>。しかし、表1に明らかのように、state 類事態が estar+ger.によって表出されることは決して珍しいことではない。この事実は estar+ger.の実態を考える上で非常に重要だと思われる。以下では、まず、同じ state 類事態の中でも頻度の高い精神活動を表す動詞を含むものから見ていく。

(5) Yo sólo estoy pensando en junio de 1999 que son mis elecciones y [...]. (1435:25)

私は私の選挙である1999年6月のことを考えているだけです。

スペイン語では、(5)のように精神活動を表わす state 類事態が estar+ger.によって表

<sup>4</sup> 括弧内の数字は当該例文の出現した Cambio16の号数とページを示す。なお、Cambio16以外からの例文はその出典とページ数を示している。

<sup>5</sup> Cf. Solé & Solé (1977), p.45., Butt & Benjamin (1994<sup>2</sup>), p.234. ただし、Solé & Soléの主張は、estar+ger. は staticな動詞とは共起しないというもので、事態全体の時間構造を問題にしているわけではない。因みに、Solé & Soléのあげる estar+ger. と共起しない staticな動詞とは tener, poseer, saber, caber などである。また、Butt & Benjaminの指摘も同様で、estar+ger. は amar や saber といった精神活動を表わす動詞、状態を表わす動詞とは共起しないというもので、主語や補語までを含む事態全体について言及しているわけではない。

出されることは頻繁で、この点はこれまでもしばしば指摘されてきた<sup>6</sup>。しかし、今回の調査結果で注目したいのは、(6)～(9)のように、従来限られた地域における特殊な変異、あるいは、単なる英語からの干渉と解釈されてきた例が少なからず見つかったことである<sup>7</sup>。

(6) [...], porque quiere estar a todas, quiere estar a lo que digan los de alrededor, a lo que yo diga. Está queriendo ser de derechas, de izquierdas, de centro, de rey, de jefe de Estado. (1433:23)

なぜなら彼はまわりにいる人たちの言うことでも、私の言うことでも、何でもやる用意ができていたようにしたいからです。彼は右にもなりたいし、左にもなりたいし、中道にもなりたいし、国王、元首の側にもなりたがっているんです。

(7) Y por otro lado que las restricciones de inmigración que está habiendo hacia ciudadanos de América Latina, les parecen excesivas. (1280:33)

また一方、ラテンアメリカの市民に対して存在している移民制限は、彼らには度の過ぎたもののように見えています。

(8) El Banco Central Europeo está siendo el blanco de múltiples ataques, sobre todo alemanes y franceses, [...] (1424:31)

ヨーロッパ中央銀行は複数の攻撃、とりわけドイツとフランスの攻撃的になっています。

(9) Una pregunta sobre otro de los jóvenes del Partido, Alberto Ruiz-Gallardón, quien está siendo muy atacado por alguna prensa de Madrid. (1266:37)

党のもうひとりの若手、Alberto Ruiz-Gallardón についての質問ですが、彼はマドリードのある新聞によって大変攻撃されています。

(6)は *querer* (欲する) という動詞と不定詞からなる願望を表わす *state* 類事態が *estar+ger.* によって表出されたものである。この(6)の当該文の直前には同じ *querer* と不定詞からなる願望文が *presente* という単純形で表出されているが、これは *state* 類事態の単純形による表出と *estar+ger.* による表出の間に何らかの意味的相違があることを示唆するもので興味深い。次の(7)は、存在を表わす *hay* が *estar+ger.* によって表出された例である。Butt & Benjamin によれば、Kany はこのような *hay* の *estar+ger.* はチリやアンデス地域の口語体で出現することはあっても標準スペイン語で聞かれることはない、と報告しているという<sup>8</sup>。しかし、スペインのスペイン語を対象とした今回の調査でも *hay* の *estar+ger.* による表出は2例確認されており、この用法はすでにスペイン語圏全体で広く流布していると思われる。(8)、(9)はどちらも繫辞動詞 *ser* が *estar+ger.* によって表出された例である。このうち(8)の *ser* 文は主語の属性を表わしたものであるが、このような属性を示す *ser* 文の *estar+ger.* については、特に、主語に *agentivity* (動作主性) が認められるときにのみ可能だとする意見がある<sup>9</sup>。しかし、そのような主張は、(8)のように、

<sup>6</sup> Cf. Butt & Benjamin (1994<sup>2</sup>), p.234. なお、本調査における *pensar* の *estar+ger.* による表出頻度は、*state* 類事態90例のうち13例であった。

<sup>7</sup> Cf. Gili Gaya (1979:12), p.114, Solé & Solé (1977), p.45, Butt & Benjamin (1994:2), p.235.

<sup>8</sup> Cf. Butt & Benjamin, *ibid.*, p.235.

<sup>9</sup> Cf. Rodríguez Espiñeira (1990), p.185, nota20.



無生で agentivity を持たない事物を主語とする ser 文も estar+ger. による表出が可能であるという事実を説明することはできない<sup>10</sup>。(9)は ser と過去分詞からなる受身文が estar+ger. によって表出された例である。この ser 受身文の estar+ger. による表出はこれまで英語による干渉、いわゆる anglicism のひとつと見なされてきたが、今回の調査では、state 類事態の estar+ger. による表出90例のうち17例までがこの ser 受身文であり、単なる英語の転移とは見なせないほど頻繁に出現しているのが分かる。ser 受身文がこのように頻出するのは、ser 受身文の動詞単純形による表出と estar+ger. による表出との間には明らかな意味的違いがあるからだと考えられる。

次に telic 事態である accomplishment 類事態と achievement 類事態の estar+ger. による表出を見てみる。

- (10) La OTAN incrementa la intensidad de sus bombardeos cada día; están destruyendo el país y a mi pueblo. (1436:66)

NATOは毎日空爆の激しさを増しています。彼らは、国を、そして、私の国民を破壊しているのです。

- (11) Curiosamente, cuando estalló la crisis de las vacas locas yo me estaba comiendo una hamburguesa en el tren que va de Manchester a Leeds. (1282:102)

おもしろいことに狂牛病の危機が勃発したとき私はマンチェスターからリーズに向かう電車の中でハンバーガーを食べているところだったんですよ。

- (12) Cuando el caso Zamora está llegando al Tribunal Supremo, ¿sigue afirmando usted que no conocía las cartas que [...] ? (1424:50)

サモーン事件が最高裁判所に達しようとしているときに、あなたは例の手紙を知らなかったといいつづけるのですか。

- (13) Muchos de sus colegas han declarado que la OTAN está perdiendo la guerra. (1434:64)

あなたの同僚の多くは、NATOは戦争に負けそうだと断言してきました。

今回の調査では、telic 事態の estar+ger. による表出の頻度は、atelic 事態のそれに比べると高くなかった。しかし、それは telic 事態の estar+ger. による表出が atelic 事態のそれより難しいからというのではなく、telic 事態の動詞単純形による表出と estar+ger. による表出との間には、atelic 事態の各形式の間に見られたような顕著な意味的差異が認められないからだと思われる。すなわち、telic 事態の estar+ger. が示す当該事態の未成立は対応する動詞単純形によっても十分表出可能なのである。しかしながら、このことは telic 事態の estar+ger. による表出と単純形による表出が意味的に等質であることを意味するものではない。以下の例に見られるように、telic 事態の単純形による表出は必ずしも常に対応する estar+ger. によって書き換え可能なわけではないからである。

- (14) Llegamos mañana. 私たちは明日到着する。(Butt & Benjamin 1994<sup>2</sup>:231)

\*Estamos llegando mañana.

<sup>10</sup> 属性を表わす ser 文の estar+ger. による総数9例のうち、主語が無生で agentivity を欠くものは7例あった。

## 1.2. estar+ger. の時制

次に、estar+ger. がどのような時制によって表出されるかの調査結果を、表2にあげる。

表2 estar+ger.の時制

presente	688例(91.3%)
imperfecto	39例(5.2%)
perfecto compuesto	15例(2.0%)
pretérito	8例(1.0%)
futuro	4例(0.5%)
抽出総数	754例(100%)

今回の調査結果によれば、estar+ger. はもっぱら不完了アスペクトを持つといわれる時制形式で表出されるのが分かる。この不完了アスペクトの時制形式というのは、山村(1996b)によれば、ある基準時と同時関係にある事態を示す動詞形式であることから、換言すれば、estar+ger. は任意の基準時と同時関係にある事態を示すときにこそ使用されやすい形式ということになる。しかし、estar+ger. は完了アスペクトを持つ時制形式による表出も可能であり、結局、スペイン語の estar+ger. は King (1995) がいうように、すべての時制形式によって表出可能といえる<sup>11</sup>。本節ではこれらのことを踏まえた上で、特に、pretéritoによって表出された estar+ger. に焦点をあてその実態を観察していきたい。なお、今回の調査で抽出された pretérito の estar+ger. は8例と少なかったため、観察にあたっては先行研究の中にある用例も参考にした。

まず、本調査において抽出された pretérito によって表出された estar+ger. について見ておく。(15)～(17)を参照されたい。

(15) Antes de juntarnos para grabar el último elepé, cada uno estuvo trabajando un año en sus propios proyectos y [...] (1264:104)

最近出したディスクを録音するために集まる前に、私たちはそれぞれ1年間自分のプロジェクトで仕事をしていました。

(16) Los principales productores de series de animación japonesa - [...] - estuvieron intercambiando impresiones y llegaron al acuerdo [...]. (1431:97)

日本のアニメシリーズの主たるプロデューサーたちは印象を相互に交換していた、そして合意に至った。

(17) Bueno, pero estuve trabajando de camarera mientras asistía al colegio, era una alumna becada. (1431:99)

ええ、でも私は大学に行ってる間ウェイトレスをして働いていましたよ、奨学生でしたから。

今回の調査で抽出された pretérito の estar+ger. は(15)のように期間を示す副詞句と共に起するものが多く、総数8例のうち4例までがこのタイプだった。しかし、(16)、(17)が示すように、この期間副詞句との共起は pretérito の estar+ger. が出現するための義務的

<sup>11</sup>Cf. King(1995), pp.96-99.

条件ではない。

ところで、本調査で抽出された *pretérito* の *estar+ger.* は、上の例からも分かるように、すべて *activity* 類事態を対象としたものだった。しかし、以下の例が示すように、*pretérito* の *estar+ger.* は *activity* 類事態に限られるわけではなく、他の分類事態をも対象とすることができる。

(18) Juan estuvo teniendo problemas con sus padres por muchos años. (Westfall 1996: 296)

フアンは長年両親と問題を起こしていた。

(19) María estuvo viviendo en Madrid antes de mudarse para Buenos Aires. (Ibid.)

マリアはブエノスアイレスへ引っ越す前にマドリッドに住んでいた。

(20) Estuvo escribiendo una carta un rato. (Ibid.:299)

彼はしばし手紙を書いていた。

(21) Estuvieron construyendo una cabina por muchos años. (Ibid.:313)

彼らは長年キャビンを建設中だった。

(18), (19) は *state* 類事態を、また、(20), (21) はともに *accomplishment* 類事態を対象とした *pretérito* の *estar+ger.* による表出である。どの例も期間を示す副詞句と共に起している点に興味深いだが、上でも見たように、これは *pretérito* の *estar+ger.* による表出の条件とは思われない。ただし、*achievement* 類事態が対象となる場合はいささか事情が異なり、この期間副詞句との共起の有無が *pretérito* の *estar+ger.* による表出の可否に深く関わっているように見える。以下の例を参照されたい。

(22) \*Estuvo ganando la carrera. (Ibid.:318)

彼はレースに勝ちそうだった。

(23) Madre se estuvo muriendo durante siete años. (Squartini 1998:43, A.M.Matute)

母は7年間死にそうだった。

(22), (23) はどちらも *achievement* 類事態を対象とした *pretérito* の *estar+ger.* による表出であるが、その文法性には明らかな違いがある。その理由については、今のところ期間副詞句の有無以外考えられない。なぜなら両者とも当該事態が成立する前の、いわば、その事態が成立するにあたっての準備段階を示しているという点では何の違いもないからである。このことは、*achievement* 類事態の *pretérito* の *estar+ger.* による表出には、他の分類事態の同形式による表出よりも強い制約がかかることを示唆するものである。Westfall (1995) は、この *achievement* 類事態の *pretérito* の *estar+ger.* による表出について、それが可能になるのは当該文が当該事態の反復を示している場合であると述べ、(24) の例をあげている<sup>12</sup>。

(24) Estuvo ganando las carreras todo el verano. (Westfall 1995:318)

<sup>12</sup>Cf. Westfall (1995), pp.316-319.

彼はその夏中レースに勝っていた。

しかし、(24)の事態は、山村(1999)の基準では activity 類事態に分類されるものであり、achievement 類事態の例としては適切でない。また、(23)のような用例の存在を考えると、achievement 類事態の pretérito の estar+ger. による表出の問題は、単に当該事態の反復を持ち出すだけでは解決できないものと思われる。

以上、estar+ger. の中でも特に pretérito によって表出された例に焦点をあて観察してきた。その結果、少なくとも pretérito によって表出された例を見る限り、estar+ger. という形式には「継続性」という特徴を付与することが可能だと思われる。ここで見た(15)～(24)の例文のほとんどは期間を示す副詞句と共に起しており、とりわけ achievement 類事態を対象としたものは、この期間副詞句との共起そのものがその出現のための条件となっているようにも見えるからである。とはいえ、この「継続性」の正体が何かについては、まだ検討すべき点が多々残っている。

### 1.3. estar+ger. の出現環境

1.2. では、特に、pretérito の estar+ger. が期間副詞句と共に起しやすいのを見たが、estar+ger. という形式自体は期間副詞句以外のさまざまな時の副詞句と共に起することができる。そこで、ここでは、estar+ger. がどのような時の副詞句、あるいは、時の副詞節と共に起し、どのような意味内容を表わしているのかを観察していく。

#### 1.3.1. estar+ger. と共に起する時の副詞句

estar+ger. によって表出された文と共に起する時の副詞句は、その estar+ger. の取る時制にしたがって、期間を示す副詞句、基準時を示す副詞句、当該事態の成立時を示す副詞句、当該事態の反復を示す副詞句に分けることができる。このうち期間を示す副詞句は、前節で見たように、pretérito や perfecto compuesto といった完了アスペクトを持つとされる時制で表出された estar+ger. と共に起することが多い。斜体は当該副詞句を指す。

(25) Estuve haciendo monólogos en bares *más de diez años* [...] (1437:82)

私は10年以上バルでひとり芝居をやっていました。

(26) He estado seis años entrenándome, desde que me seleccionaron en 1992 [...] (1425:82)

私は1992年に選考されて以来、6年間訓練を受けてきました。

(27) Estuve yendo más de cuarenta años a Alemania. (Squartini 1998:38)

私は40年以上ドイツに行っていました。

(25)、(26)はともに activity 類事態を対象とした estar+ger. で、共に起した期間副詞句は当該事態が有効だった期間を示している。(27)は[yo ir a Alemania] (私がドイツに行くこと) といった accomplishment 類事態を対象とした estar+ger. であるが、これは先に見た同じ accomplishment 類事態の pretérito による表出例(20)、(21)とは異なる解釈を受ける。(20)、(21)の例では、estar+ger. の対象となっている accomplishment 類事態の成立は何ら表出されておらず、そこに出現した期間副詞句もただ当該事態が開始され成



そして私たちは存在するすべてのボタンを押し、一日24時間働いているのです。

(30)は Ueda (1987) の広汎な資料の中で唯一確認された imperfecto の estar+ger. が期間副詞句と共に共起した例であり、(31)は今回の調査で抽出された不完了アスペクトの時制形式によって表出された estar+ger. が期間副詞句と共に共起した例であるが、これら二例を比較してみると、当該副詞句が対象としている事態がそれぞれ異なっていることに気づく。(30)の期間副詞句 *unos minutos* は imperfecto によって表出された estar+ger. 全体を対象とし、主語である私たちが数分前から休憩していたことを示しているのに対し、(31)の期間副詞句 *24 horas* が対象としているのは estar+ger. の現在分詞の部分だけと解釈されるからである。つまり、(30)では、まず [nosotros descansar] (私たちが休憩すること) という事態が imperfecto の estar+ger. によって表出され、それに期間副詞句が付加されていると理解されるのに対し、(31)では、期間副詞句が始めから [nosotros trabajar 24 horas al día] (私たちが1日24時間働くこと) という形で estar+ger. によって表出される事態の中に組み込まれ、その結果、それは trabajar の部分だけを修飾していると理解されるのである。

次に基準時を示す副詞句と共に共起した estar+ger. について見てみる。ここでいう基準時とは estar+ger. によって表出された事態の時間的枠組み<sup>13</sup>といえるものであり、対象となるのは presente, imperfecto といった不完了アスペクトの時制によって表出された estar+ger. 文である。以下の例を参照されたい。

(32) *Todo aquello que dejé lo estoy viviendo ahora, [...] (1430:85)*

私はかつて捨てたものすべてを今生きているのです。

(33) *General, ¿ es usted consciente de la contradicción que existe entre lo que afirmaba hace 24 años y lo que está haciendo hoy? (1434:64)*

將軍、あなたは24年前に肯定していらっしやたことと今日やっらっしやることの間にある矛盾を意識していらっしやいますか。

(34) *No siempre lo hemos hecho así, pero en los últimos años lo estamos consiguiendo. (1438:51)*

私たちは必ずしも常にそうしてきたわけではありませんが、最近数年はそれを達成しています。

(35) *Al principio de este año, el ACNUR estaba asistiendo a casi 400.000 desplazados en el interior de la provincia [...] (1435:64)*

今年の初め、ACNUR は県の内部に移動させられた約40万人の難民の世話をしていました。

1.2. で見たように、今回の調査でもっとも頻度の高かったのは presente によって表出された estar+ger. であるが、それらは(32)~(34)にあるような直示的 (deícticos) な時の副詞句と共に共起していることが多い。このような副詞句は、当該 estar+ger. 文がそれに対して同時関係を示すことになる発話時を明確化したものと考えられる。また、同様に、(35)にあるような imperfecto の estar+ger. 文と共に共起した時の副詞句は、当該 estar+ger. 文がそれに対して同時関係を示している既定の過去時をよりはっきりと示したものと思わ

<sup>13</sup>この「時間的枠組み」という用語は中岡 (1977) から借用した。

れる。以上のことを山村（1997）で提示された公式で示すと次のようになる。

(34) […] *en los últimos años* lo estamos consiguiendo.

=OoV

=O(en los últimos años)oV

=O(en los últimos años)[lo estamos consiguiendo]

(35) *Al principio de este año*, el ACNUR estaba asistiendo a casi 400.000 desplazados.

=PoV

=P(al principio de este año)oV

=P(al principio de este año)[el ACNUR está asistiendo a casi 400.000 desplazados]

山村（1996b）の解釈によれば、*presente* によって表出された事態はすべて OoV という公式によって書き換えることができる。Oは発話時を表わし、oVは当該事態の*presente* が示す、発話時との同時関係を表わしている。(34)ではこのOの発話時が*en los últimos años*によって明確化されているが、それが可能なのは*en los últimos años*（最近数年）という副詞句にはOの示す発話時が概念的に必ず包含されているからである。同様に、(32)、(33)では、Oが*ahora*, *hoy*という副詞句によって明確化されているが、このようにOが多様な副詞句によって置き換えられるのは、山村（1996b）の既定する発話時そのものが「発話の時を含むすべて」という非常に応用範囲の広いものだからである<sup>14</sup>。一方、(35)のように*imperfecto*によって表出された事態はすべてPoVという公式によって書き換えられることになる。このときPは既定の過去時を表わし、oVは*presente*の場合と同じく当該事態のPに対する同時関係を表わしている。*imperfecto*の*estar+ger.*について注目すべきは、上の公式でも明らかのように、その本質は*presente*の*estar+ger.*と同じだという点である。つまり、*imperfecto*の*estar+ger.*は*presente*の*estar+ger.*の基準時が過去にシフトしたものに過ぎないのである。

次に成立時を表わす副詞句について見る。この副詞句と共起するのはもっぱら*pretérito*の*estar+ger.*といってよい。

(36) ¿Qué es lo último que anotó usted? — *Anteayer* estuve anotando algo no vinculado con la política. (1264:24)

最近メモしたことは何ですか。 — おととい何か政治に関わりのない事をメモしました。

(36)の副詞*anteayer*は[yo *estar* *anotando* algo～]（私が何か～であることをメモしていること）という事態が成立した時点を示している。このように*pretérito*の*estar+ger.*と共起した時の副詞句だけが当該事態の成立時を示すのは、*pretérito*の持つ機能自体にその理由があると考えられる。山村（1996a, 1996b, 1997）によれば、*pretérito*の機能は当該事態の未成立から成立への変化、すなわち、当該事態の成立そのものを示すことにある。したがって、同形式によって表出された文と共起した時の副詞句は、定義上、当該事態の

<sup>14</sup>しかし、この規定は、逆に、発話時を含まない時はすべて排除されることをも意味する。

成立時を示すことになるのである。しかし、次の例に見るように、pretérito の estar+ger. と共起する時の副詞句には強い制約がある。

(37) \**Ayer a las cinco el avión estuvo saliendo.* (Squartini 1998:71)

昨日 5時にその飛行機は出発しつつあった。

(37)'*Ayer a las cinco el avión estaba saliendo.* (Ibid.)

昨日 5時にその飛行機は出発しつつあった。

(38) \**Al mediodía estuvieron comiendo.* (Westfall 1995:328)

正午に彼らは食事中だった。

(39) *A las seis estaban comiendo.* (Ibid.)

6時に彼らは食事中だった。

(37)は achievement 類事態, (38)は activity 類事態の pretérito の estar+ger. が a las cinco, al mediodía という momentary adverbials<sup>15</sup>と共起した例であるが, どちらも非文となる。一方, 同じ achievement 類, activity 類の estar+ger. でも, imperfecto によって表出された (37)', (39)は同副詞句と何の問題もなく共起することができる。この pretérito と imperfecto の間に見られる momentary adverbials との共起に関する違いは, 当該 estar+ger. 文と momentary adverbials との間にある解釈上の違いに対応していると思われる。つまり, imperfecto の estar+ger. と共起した momentary adverbials は当該事態の基準時を示し, pretérito の estar+ger. と共起する momentary adverbials は当該事態の成立時を示しているのである。しかし, (37), (38)が示すように, pretérito の estar+ger. は momentary adverbials とは共起できない。それはなぜか。本稿は, それは, pretérito が表出する estar+ger. の未成立から成立への変化と momentary adverbials との間に意味的齟齬が生じるからだと考える。先に見た文法的な例文(36)と非文法的な例文(37), (38)を比較してみると, 両者の間にあるのは共起した副詞句の示す時間的インターバル (intervalo temporal) の違いだけであることが分かる。すなわち, pretérito が表出する estar+ger. の成立には, 少なくとも anteayer, ayer (昨日)等の副詞句が示す程度の時間的インターバルが必要なのだが, ここで扱っている momentary adverbials にはそのインターバルが欠けているために, pretérito の estar+ger. はそれらと共起することができないと考えるのである。このような pretérito の estar+ger. と momentary adverbials との共起の不可能性は, 先に見た同形式の期間副詞句との親和性とちょうど相補的關係にあるといつてよかろう。

最後に事態の反復を示す副詞句と共起した estar+ger. について見てみる。Solé & Solé (1977)と Westfall (1995)は, estar+ger. は通常反復を表わす副詞句とは共起しない, と述べている<sup>16</sup>。このうち Westfall (1995:321)は, “Habituals, a type of derived Stative, cannot be expressed by the progressive. For this reason, the progressive is incompatible with frequency adverbials” と述べ, todos los días (毎日)という副詞句と共起した \**Juan estaba escuchando música todos los días.* (フアンは毎日音楽を

<sup>15</sup>momentary adverbs という用語は Westfall (1995)からの借用である。

<sup>16</sup>Cf. Solé & Solé (1977), p.43, Westfall (1995), p.321.



聴いていた) という文には\*をつけていた。しかし、今回の調査では、以下のような例が見つかっている。

(40) Y a mí me gustaría que no estemos todos los días buscando una noticia nueva en la negociación de la tregua, [...] (1425:50)

私はできれば、私たちが毎日停戦協定の新しいニュースを探しているなんてことがなければいいと思っています。

(41) Y mientras estoy trabajando existen muchas cosas para hacer, y me encuentro hablando por teléfono cada momento que no estoy haciendo nada, [...] (1269:56)

それに私が働いている間にもやらなければならないことはたくさんあります。それで何もしていないときにはいつも電話で話をしているんですよ。

(40)の *todos los días*, (41)の *cada momento* はどちらも当該事態の反復を示す副詞句であり、それぞれ不完了アスペクトを持つ *estar+ger.* と共起している。また、今回の調査では、次の例のように、典型的な反復を示す副詞である *siempre* と共起した *estar+ger.* の数も少なくなかった。

(42) Pero lo bonito de esta profesión es que con cada cosa que haces es como pasar un examen, [...] / Y sobre todo en un teatro, [...] El cómico siempre está pasando exámenes. (1261:73)

でもこの仕事で素敵なのは、自分のすることのひとつひとつがまるで試験にパスするようなことだということです。/特に劇場ではそうです。コメディアンはいつも試験にパスしているんです。

以上の例から、*estar+ger.* も当該事態の反復、習慣性を示す副詞句と共起するということができる。このような *estar+ger.* 文が表出する意味内容は、対応する動詞単純形が意味するものとは当然異なっていると推察されるが、その詳しい分析は第2節で行うことにしたい。

### 1.3.2. *estar+ger.* と *cuando* 節

最後に、*estar+ger.* がその従文となる *cuando* 節と共起した際に見せる特徴について指摘しておこう。以下の例を参照されたい。

(43) Por eso, *cuando* una estrella hace campaña en favor de cualquier cosa, se está aprovechando indebidamente de la imagen creada con su trabajo. (1272:61)

だから、スターが何かのためにキャンペーンをするときは、自分の仕事で作られたイメージを不当に利用しているんです。

(43)は、発話時に実際に起こっている具体的な事態に言及したものではなく、社会一般に起こる現象について述べたものである。このように特定の時に言及することなく総称的な意味で用いられた *estar+ger.* とその従文との時間関係を、当該 *estar+ger.* を対応する

動詞単純形に置換した場合のそれと比較すると、両者の違いが鮮明になってくる。

(44) *Siempre te estás quejando cuando* llego.

≠ *Siempre te quejas cuando* llego. (Squartini 1998:81)

私が着くといつも君はぶつぶつ言っている。

≠私が着くといつも君はぶつぶつ言う。

(44)の *te estás quejando*. と *te quejas* は同じ [tú quejarte] (君がぶつぶつ言うこと) という事態を対象としているが、*cuando* 節中の事態に対する時間関係は互いに異なっている。前者は「私が着いたときすでに君はぶつぶつ言っている」ことを示し、[tú quejarte] と [yo llegar] (私が着くこと) では [tú quejarte] の方が先に生起し、かつ、その事態は [yo llegar] という事態の生起とも時間的に重なっているのが分かるが、後者は「私が着くと君はぶつぶつ言う」ことを示し、[tú quejarte] と [yo llegar] のうち先行して生起するのは [yo llegar] という事態の方であり、[tú quejarte] は [yo llegar] の生起後、継起的に生起するだけであることが分かる<sup>17</sup>。このような従文に対する *estar+ger.* と単純形の時間関係の相違は、両形式の間にある本質的な機能的差異を示唆するものであり非常に重要だと思われる。しかし、次の例に見られるように、この *estra+ger.* と単純形の違いは必ずしもいつも有効なわけではない。

(45) \**Cuando* llegué, *estuvieron abriendo* una botella de vino. (Westfall 1995:304)

私が着くと彼らはワインを1瓶開けつつあった。

(45)' *Cuando* llegué, *abrieron* una botella de vino. (Ibid.)

私が着くと彼らはワインを1瓶開けた。

(45)は *pretérito* によって表出された事態を従えた *cuando* 節と共に起した *pretérito* の *estar+ger.* であるが、非文となっている。しかし、この例の主文と従文との時間関係は(43)、(44)のそれと等しい。そうすると、(45)だけが非文になるのは、その主文と従文がどちらも *pretérito* によって表出されているという点に起因すると考えざるをえないだろう<sup>18</sup>。先に見たように、*pretérito* の本質的機能が当該事態の成立の表示にあるとすれば、この *pretérito* によって表出された事態を従えた *cuando* 節は必然的に当該事態の成立時を指示することになる。これを換言すれば、その節中に *pretérito* によって表出された事態を含

<sup>17</sup>動詞単純形によって示される主文と従文との時間関係は各事態の時間構造と深く関係しており、必ずしも常に継起的なわけではない。例えば、次のように *cuando* 節の事態が activity のときの主文と従文の時間関係は、継起的というよりはむしろ同時的といったほうがよいだろう。 *Cuando cocino, siempre me ayuda mi marido.* (私が料理するときには、いつも夫が手伝ってくれる。) しかし、ここで重要なのは、その時間関係が何であれ、動詞単純形の示す従文との時間関係と *estar+ger.* の示すそれとの間には明らかな違いがあるという事実である。

<sup>18</sup>*cuando* 節が *pretérito* で主文が *imperfecto* の *estar+ger.* の場合には非文にはならない。 *Cuando* llegué, *estaban abriendo* una botella de vino. (私が着くと彼らはワイン1瓶を開けつつあった。) これは *imperfecto* の *estar+ger.* が基準時を示す副詞句と共に起可能であることと平行した現象と考えられる。前述の例文(35), (37), (39)を参照されたい。

む cuando 節は momentary adverbials と等しい機能を持つ、ということである。そのように考えると、(45)の非文性は、上で見た(37)、(38)の非文性と同一性質のものということになる。

(37) \**Ayer a las cinco el avión estuvo saliendo.* (Squartini 1998:71)

昨日5時にその飛行機は出発しつつあった。

(38) \**Al mediodía estuvieron comiendo.* (Westfall 1995:328)

正午に彼らは食事中だった。

(45) \**Cuando llegué, estuvieron abriendo una botella de vino.* (Westfall 1995:304)

私が着くと彼らはワインを1瓶開けつつあった。

つまり、(45)が非文なのは(37)、(38)のときと同様、cuando llegué には[ellos estar abriendo una botella de vino] (彼らがワインを1瓶開けつつあること) という事態が成立するのに必要な時間的インターバルが欠如しているからと考えることができるのである。

#### 1.4. まとめ

以上、本節では estar+ger. の本質的機能を考察するための実態調査とその結果分析が行われた。それらは、次のようにまとめられる。

- ① estar+ger. の実態を観察するにあたり、(1)どのような事態が estar+ger. によって表出されるか、(2)estar+ger. はどのような時制によって表出されるか、(3)estar+ger. はどのような環境で出現するか、という項目をたて、それらをスペインで発行されている週刊誌 Cambi016のインタビュー記事に出現したすべての estar+ger. を対象にして調査した。
- ② 項目(1)を調査するにあたっては予め estar+ger. の対象となった事態の分類をするための基準が必要となるが、本稿はその基準として山村(1999)で提案されたものを用いた。この事態分類の基準に従うと、事態は、まず、当該事態の imperfecto が同じ事態の pretérito による表出内容を包含しているか否かによって atelic, telic に二分され、その後、atelic 事態は imperfecto の意味するところに従って、state 類と activity 類に、また、telic は accomplishment 類と achievement 類に分類されることになる。
- ③ 項目(1)の調査結果は、estar+ger. の抽出総数754例のうち、578例(76.5%)が activity 類、91例(12.2%)が state 類、43例(5.7%)が accomplishment 類、42例(5.6%)が achievement 類であった。
- ④ もっとも頻度の高かった activity 類の特徴としては、動詞自体は telic であるが、その主語や補語が不定複数のために当該事態全体としては activity 類に分類されることになったという例が多かったこと、activity 類の estar+ger. は対応する動詞単純形に比べて、当該事態の動的面を強調していること、の二点をあげることができる。
- ⑤ 先行研究の中には、estar+ger. は static な動詞とは馴染まないと指摘するものがあるが、今回の調査では、いわゆる static な動詞を含む事態が同形式によって表出されることは決して珍しいことではないことが確認された。また、このような state 類事態

- の estar+ger. では、特に対応する動詞単純形との違いが明らかになることも分かった。
- ⑥ accomplishment 類, achievement 類事態の estar+ger. による表出の頻度は atelic 事態のそれに比べると格段に低い。このことは, telic 事態の動詞単純形による表出と estar+ger. による表出との間には atelic 事態の各形式の間に見られたような顕著な意味的差異が認められないこと, を示唆すると考えられる。
- ⑦ 項目(2)の調査結果は, estar+ger. の抽出総数754例のうち, 688例(91.3%)が presente, 39例(5.2%)が imperfecto, 15例(2.0%)が perfecto compuesto, 8例(1.0%)が pretérito, 4例(0.5%)が futuro であった。この結果に従うならば, estar+ger. はもっぱら不完了アスペクトを持つ時制で表出されることが分かる。しかし, 頻度は低いものの同形式は完了アスペクトの時制によって表出されることも可能であり, 結局, estar+ger. はすべての時制によって表出可能と結論づけられる。
- ⑧ 本調査において pretérito によって表出された estar+ger. はすべて activity 類事態を対象としたものだったが, 先行研究のデータによれば, pretérito の estar+ger. は activity 類事態以外のどの事態をも対象とすることができる。しかし, estar+ger. の pretérito による表出は他の時制による表出よりも制約が強く, 特に, telic 事態のそれは期間副詞句との共起の有無と深く関わっている。
- ⑨ 項目(3)は estar+ger. がどのような副詞句と共起するかを調べるものであるが, その結果は estar+ger. の取る時制に従って, 期間を示す副詞句, 基準時を示す副詞句, 当該事態の成立時を示す副詞句, 当該事態の反復を示す副詞句に分類された。
- ⑩ 期間を示す副詞句は pretérito の estar+ger. と共起し, 対象となる事態が atelic な場合には当該事態が有効な期間を, また, それが telic な場合には, 当該事態が開始され成立するまでの中途の期間, あるいは, 成立した当該事態が反復された期間を示す。期間を示す副詞句との関係で特に注目すべきは, 通常, 期間副詞句とは共起しない telic 事態の pretérito の表出が, estar+ger. の形式を取ると簡単に同副詞句と共起可能になるという事実である。
- ⑪ 基準時を示す副詞句は presente, imperfecto の estar+ger. と共起する。特に, presente の estar+ger. は, 発話時を明確化する直示的な時の副詞句と共起することが多い。
- ⑫ 当該事態の成立時を表わす副詞句と共起するのはもっぱら pretérito の estar+ger. である。これは pretérito が「当該事態の未成立から成立への変化を示す」という機能を持っていることに因る。しかし, pretérito が示す estar+ger. の成立にはある程度の時間的インターバルが必要で, それを欠いた momentary adverbials のような時の副詞句は, pretérito の estar+ger. とは共起することができない。
- ⑬ 先行研究の中には estar+ger. と反復を示す副詞句との共起を認めないものがあるが, 今回の調査結果によれば, estar+ger. は反復を示す副詞句とも問題なく共起することができる。この反復を示す副詞句と共起した estar+ger. と対応する動詞単純形との間には当然意味的差異があると仮定される。
- ⑭ 特定の時に言及することなく総称的に用いられた estar+ger. と cuando 節によって導かれたその従文との時間関係を, 当該 estar+ger. を対応する動詞単純形に置換した場合のそれと比較すると, estar+ger. と対応する動詞単純形との違いが鮮明になる。

つまり、前者は *estar+ger.* の対象となっている事態が *cuando* 節内の事態よりも先に生起し、かつ、*cuando* 節内事態の生起とも時間的に重なって生じていることを示すのに対し、後者は *cuando* 節内の事態が先に生起し、主文事態はその後に継起的に生起することを示すだけだからである。なお、この *estar+ger.* と動詞単純形の違いは *pretérito* には応用されない。

以上の結果に従うならば、最初に見た、*estar+ger.* はその対象となる事態の「継続」を示すという説、また、*estar+ger.* は当該事態を「現前化」して示すという説のどちらも有効であることが分かる。しかし、このことは同時に、*estar+ger.* の本質的機能はこれらの説のどちらか一方だけでは説明しきれないことを示すものでもあろう。本稿は、今回の調査結果から、*estar+ger.* には従来主張されてきた「継続化説」、「現前化説」の両方を包含するような本質的機能があると考えますが、その詳細な考察は続稿に譲ることとする<sup>19</sup>。

#### 参考文献

- Butt, J. & Benjamin, C. (1994<sup>2</sup>): *A New Reference Grammar of Modern Spanish*, London: Edward Arnold.
- Fernández Ramírez, S. (1986): *Gramática española 4. El verbo y la oración*, ordenado y completado por Bosque, I., Madrid: Arco/Libro, S. A.
- Garey, H. B. (1957): "Verbal Aspect in French", *Language* 33, pp.91-110.
- Gili Gaya, S. (1979<sup>12</sup>): *Curso superior de la sintaxis española*, Barcelona: Bibliograf.
- Gómez Torrego, L. (1988): *Perífrasis verbales*, Madrid: Arco/Libros, S.A.
- King, L. D. (1992): *The Semantic Structure of Spanish*, Amsterdam: John Benjamin Publishing Company.
- Quesada, J. D. (1995): "Estar + -ndo y el aspecto progresivo en español", *Iberoromania* 42, pp.8-29.
- Rallides, C. (1971): *The Tense Aspect System of the Spanish Verb as Used in Cultivated Bogotá Spanish*, The Hague: Mouton.
- Real Academia Española (1973): *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*, Madrid: Espasa-Calpe, S. A.
- Rodríguez Espiñeira, M<sup>a</sup> J. (1990): "Clases de 'Aktionsart' y predicaciones habituales en español", *Verba* 17, pp.171-210.
- Solé, Y & Solé, C. A. (1977): *Modern Spanish Syntax: A Study in Contrast*, Lexington: D.C. Heath and Company.
- Squartini, M. (1998): *Verbal Periphrasis in Romance: Aspect, Actionality and Grammaticalization*, Berlin New York: Mouton de Gruyter.
- Ueda, H. (1987): *Análisis lingüístico de obras teatrales españolas (III) Textos e índices de palabras (Versión aumentada)*, Tokio: Universidad Nacional de Estudios

<sup>19</sup>第2節、第3節については『独仏文学研究』第49号に「*estar+gerundio* の記述と考察 (下)」として発表する予定である。

Extranjeros de Tokio.

Vendler, Z.(1967): "Verbs and Times", *Linguistics in Philosophy*, pp.97-121, Ithaca: Cornell Univ. Press.

Westfall, R.H.(1995): *Simple and Progressive Forms of the Spanish Past Tense System: A Semantic and Pragmatic Study in Viewpoint Contrast*, Ph. D. dissertation, Univ. of Texas at Austin, Ann Arbor: UMI.

中岡省治(1977): 「進行形「estar+gerundio」に関する考察(1)」*Estudios Hispánicos* 4, pp.1-14.

山村ひろみ(1996a): 「cantéと事行の時間構造」『独仏文学研究』第46号, pp.113-133.

———(1996b): 「canté/cantabaのアスペクト対立に基づく解釈をめぐって」*HISPANICA* 40, pp.48-62.

———(1997): 「canté形, cantaba形と時間的限定性」*HISPANICA* 41, pp.53-66.

———(1999): 「スペイン語における事態の分類について」*HISPANICA* 43, pp.41-52.

## Descripción e interpretación de la frase “estar + gerundio” (I)

Hiromi YAMAMURA

En español existe una frase verbal que se compone del verbo copulativo “estar” y el gerundio. Con respecto a la función de esta frase, se han propuesto las dos interpretaciones diferentes. Una de ellas insiste en el hecho de que la frase “estar+gerundio” exprese la prolongación de la situación en cuestión y la otra en su particularidad de actualizar la situación misma. ¿Cuál de las dos es más efectiva? O, ¿la frase “estar+gerundio” tiene alguna función más integral que incluya estas dos interpretaciones? Nuestro objetivo está en (1) describir las situaciones reales de la frase “estar+gerundio” y (2) asignar a esta frase una función que pueda explicar todas esas situaciones reales que se observan en la frase “estar+gerundio”. En la primera parte (I) de este trabajo tratamos exclusivamente de la descripción de las situaciones reales de la frase “estar+gerundio”. En cuanto a los datos para hacer esta investigación, utilizamos todas las frases de “estar+gerundio” que salieron en las páginas de entrevista de la revista ‘Cambio16’ publicada en España.

En esta investigación, las situaciones reales de la frase “estar+gerundio” se observan desde los tres puntos de vista siguientes: ① ¿cuáles son los tipos de situaciones que se expresan en la frase “estar+gerundio”?, ② ¿en qué tiempo verbal se expresan las frases de “estar+gerundio”?, ③ ¿con qué adverbios temporales ocurren las frases de “estar+gerundio”? El resultado se resume como sigue:

- Para decidir a qué tipo de situación pertenece cada ejemplo, hemos utilizado el criterio propuesto por Yamamura (1999), según el cual todas las situaciones, que se componen del verbo y sus argumentos, se dividen, primero, en el tipo atético y el tipo tético y, después, las situaciones atéticas se dividen en el tipo de “actividad” y el de “state” y las situaciones téticas se dividen, a su vez, en el tipo de “accomplishment” y el de “achievement”.
- De todos los 754 ejemplos de la frase “estar+gerundio”, los 578 (76.5%) son del tipo “activity”, los 91 (12.2%) del tipo “state”, los 43 (5.7%) del tipo “accomplishment” y los 42 (5.6%) del tipo “achievement”.
- En los ejemplos del “activity” se encuentran las particularidades siguientes: (a) no son pocos los ejemplos donde los verbos mismos son téticos pero, como sus sujetos o complementos son indefinidos, resulta que las situaciones enteras se consideran como atéticas. (b) comparadas con las frases expresadas en la forma

simple correspondiente, las frases de “estar+gerundio” del “activity” enfatizan la fase dinámica de la situación en cuestión.

- Aunque entre los estudios anteriores hay algunos que insisten en que es imposible que los verbos estáticos se expresen en la frase “estar+gerundio”, según nuestra observación, por lo menos, sí es posible que las situaciones del tipo “state” se expresen en dicha frase.
- Las situaciones del tipo télico no se expresan tanto en la frase “estar+gerundio” como las situaciones atélicas. Esto será debido a que en las situaciones télicas hay poca diferencia entre lo que significa la frase “estar+gerundio” y lo que significa la frase de la forma simple correspondiente.
- De todos los 754 ejemplos, los 688(91.3%) son del tiempo presente, los 39(5.2%) del tiempo imperfecto, los 15(2.0%) del perfecto compuesto, los 8(1.0%) del pretérito y los 4(0.5%) del futuro. Según este resultado, se podrá decir que la frase “estar+gerundio” se expresa principalmente en los tiempos del aspecto imperfectivo. Pero esto no excluye nunca la posibilidad de que la frase “estar+gerundio” se exprese en los tiempos del aspecto perfectivo.
- Los adverbios temporales que ocurren con la frase “estar+gerundio” se dividen, según los tiempos de la frase “estar+gerundio”, en los de duración, los del marco temporal, los de repetición y los que indican el punto temporal del cumplimiento de la situación en cuestión.
- Los adverbios temporales de duración aparecen con las frases “estar+gerundio” en el pretérito. Lo que nos debe llamar la atención es el hecho de que las situaciones télicas expresadas en el pretérito, que generalmente no ocurren con los adverbios de duración, ocurran sin ninguna dificultad con ellos cuando se expresen en la frase de “estar+gerundio”.
- Los adverbios temporales que indican el marco temporal ocurren exclusivamente con las frases “estar+gerundio” expresadas en el presente y el imperfecto.
- Aunque entre los estudios anteriores hay algunos que insisten en la imposibilidad de que las frases “estar+gerundio” ocurran con los adverbios temporales de repetición, según nuestra observación, por lo menos, se puede decir que las frases “estar+gerundio” sí pueden aparecer con ellos.
- Los adverbios que indican el punto temporal donde se realiza la situación en cuestión ocurren exclusivamente con las frases de “estar+gerundio” en el pretérito. Pero no son muchos, de hecho, los adverbios temporales que pueden aparecer con las frases de “estar+gerundio” en el pretérito. El problema es que siempre es necesario que haya suficiente intervalo temporal para que se realice una situación a la que se refiere la frase “estar+gerundio”. Dicho de otro modo, los adverbios momentáneos, como *a las cinco*, *al mediodía*, etc, no pueden aparecer con las frases de “estar+gerundio” en el pretérito porque les falta el intervalo suficiente para que se realicen las situaciones expresadas por las frases de “estar+gerundio” en cuestión.

(Continuará)